



ウサギとカメ


～カメのような生き方、実にいいじゃないか！～

校長 澤田 純一

朝の空気が肌を突き刺し、冬 暁^{ふゆあかつき}は冷え切った空気を朝の澄んだ空に変え、我が家の近くに広がるフィールドには霜柱^{しもぼしら}が立っています。そのような光景の中、私とプルート（犬）は、朝のルーティンに出かけます。

さて、今年は兎^{うさぎどし}年ですので皆さんもよく知っている「ウサギとカメ」の話をします。簡単に紹介すると、「ウサギとカメが山のふもとまで、かけっこの競争をしますが、ウサギはどんどん先に行き、カメが見えなくなったところで居眠りをはじめ、その間にカメは着実に歩き続け、ウサギが目を覚ました時にはカメがゴールで大喜びをしていた。」という話です。この話は、紀元前6世紀頃、ギリシャのイソップ氏により書かれたので「イソップ童話」と呼ばれています。なお、日本には室町時代の後期以降に伝えられたようで、一般的に知られるようになったのは明治時代に教科書に掲載されてからのようです。当時の題名は「ウサギとカメ」ではなく「油断大敵^{ゆだんたいてき}」だったそうです。まさに、作者の言いたいことそのものが題名だったのです。このウサギとカメの勝負を分析してみましょう。端的^{たんでき}に言えばウサギとカメは見ているところが違ったということです。ウサギはカメを見ていました。そこに油断が生まれました。一方、カメはゴールを見続けていました。言わんとしていることは、競争相手に惑^{まど}わされることなくゴールを見極めることの重要性を説いています。実社会でいえば目標ですね。目標をブラすことなく突き進むということです。ところで、この話には続きがあります。「負けたウサギは、次回こそ油断せずに走ろうと決心し、カメに再戦^{いど}を挑みます。そして、ウサギは先にゴールしました。そして、カメは、後からゆっくりとゴールしました。勝ったウサギは大喜びし、カメを見ました。すると、カメは負けたはずなのに、やはり喜んでいました。その理由をウサギがカメに聞くと、カメは自分の記録が前回より上回っていることを喜んでいたということです。」ここでも、カメはゴールを見ていたのです。そして、戦う相手は自分だったのです。さらに、この話には続きがあります。「1勝1敗のウサギは再再戦^{いど}を挑みました。今回ばかりは、カメは海をコースに入れてほしいことを主張しました。そして、新コースでの競争となりました。」もはや、この結末は分かりますね。カメは、確実に勝てる戦法を考え、相手に伝え納得させてレースを行いました。地道に努力することは大切ですが、これからの時代、先を読み、自ら考えて行動することも重要な生き方である。とのメッセージが込められていると思います。

今日は、先日、尊敬する先輩校長から教えてもらった話を紹介しました。「なるほど！良い話だ。」と、私は学校だよりで皆さんに伝えようと思いました。書き続けていると「はて？なぜ先輩は、この話を私にしたのだろう？」「私をウサギに例え、はたまたカメに例え^{きょうじ}教示をくれたのではないか？」そのようなことも考えました。いくつになっても、教えていただけることの、ありがたみを感じます。先輩校長に感謝しつつ、今日の話を終ります。

 寒いので健康に留意し、過ごしましょうね。 